

中国考古学の諸問題 (三) 完

五、漢代の美術 裝飾古墓

岡 田 芳 三 郎

一九五六年の文物参考資料によれば、この年までに洛陽西郊の中學校敷地で五三〇、鞍山市東郊で四〇〇、長沙では戦国の墓とあわせて一〇〇〇以上の漢墓が発掘されている。勿論これはその一部にすぎないし、その後、全国各地の主要都市附近で漢墓が発見されぬようなことは殆んどない有様であるから、今日ではその数は実におびただしいものとなつてゐるだろう。

しかし、こうした中から、いま「漢代の美術」に関する研究の動向をまとめて述べようとなると、実は、われわれはそれにふさわしいような論考が、まだあまり多くないことに当惑せざるを得ないのである。と言うのも、上にのべたような盛況はひとり漢墓に限るわけではないから、中国の考古学者は実におびただしい遺跡遺物の出現に応じてゆかねばならず、それだけでも大仕事であるから、正確な記録をとどめ、資料を整理すること以上に、研究を深めてゆくことは実に大変である。従つて現段階では「漢代の美術」というよう

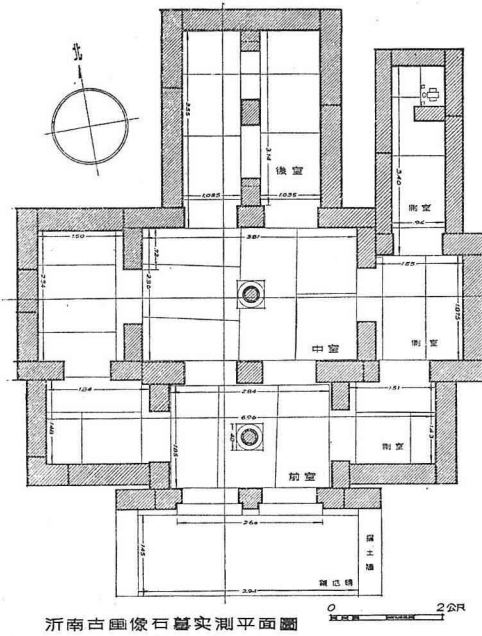
な特定の部門について、掘り下げた業績をいくつものぞむことは、時期的にも無理であると思われる。そこでわれわれは近い将来、勝れた研究が続々とあらわれ、学界が劃期的な進歩をとげるであろうことを期待しつつ、今は、中国学者がもたらした数々の貴重な新事実のうち、漢代美術に関するものとして最も注目される裝飾古墓について若干述べることにしたい。

漢墓の発見はその歴史も古く、中国考古学の黎明期にわが国学者が東北地区で発掘した漢墓から、有名な柴浪の古墓群、また蒙疆地区やインドシナ方面で発掘調査されたものなど次第に発見発掘の例は増して、漢墓に対するわれわれの知識はだんだんと豊富になつてきている。そして漢代文物のさかんな有様は、ほほ明らかとなつてきたが、これまでの発掘例でわれわれが知つてゐる漢墓は、遼陽附近の板石墓などを別とすれば、木槨墓か埴室墓がその主要なものである。ところが新中国の考古界は、このほかに立派な石室墓が存在することを明らかにしたのであるが、これは最も注目すべき業績でなければならぬ。

その発見例は次第に増加し、現在では山東省から江蘇省・安徽省の方面にかけて見られるが、さらに、墓室の主要部分を石材で組み、一部は埴できついた、いわゆる埴石墓もこの類に入れて数えるならば、その分布は更にひろがることになる。石室の構造はもとより一様ではないが、いづれも多室で、室内には天井を支えるための石柱をたてるといつた進んだ建築構造をもつものが多く、例えば河南省の南陽では、石柱八根を数える大規模なものが発見されている(文参・一九五六・一二)。また、中には天井に藻井(わが国でいう

隅三角持送り式天井)をつくるものもあつて強く興味をひくが、石室墓の石材の面には画像を刻している場合が多く、それが一そう關心を高める理由となつてゐることは言うまでもない。しかし残念ながら報告書はいたつて簡単なものが多く、詳細がわからないのは遺憾至極であるが、それらの中にあつて、山東省の沂南で発見調査された石室墓は、規模構造もすぐれた典型的なものであり、報告書もすでに立派なものが公刊されているので、それによつてこれら石室墓の一般は、知ることができるといふのである(沂南古画像石墓発掘報告)。

南北の長さ八・七〇米、東西の寛さ七・五五米、八室よりなる本



沂南古画像石墓実測平面圖



第2図 沂南石室墓画像石

墓室も、前室と中室との中央にそれぞれ八角形の石柱をたて、石柱には枳栌と柱礎をつくり出すといった複雑な構造のものであるが、墓門・門額から柱身・枳栌・柱礎・梁・前・中室の四壁などのすべてにわたつて実に豊富多様な画像を一面に刻していることが、何としても本墓の価値を貴重なものとしている。

さてこうした画像石はすでに早くから発見されており、またそれは漢代絵画の研究資料として久しく中国美術史上で重んぜられてきたものであるが、その代表遺物といへば、やはり山東嘉祥の、有名な武氏祠石室をあげねばならないであろう。ところがこの祠堂は早く水害のために崩壊し、画像を刻した石材は原位置をはなれて、そ

これらの相互関連が失なわれていることが欠点としておしまれてきたのであるが、一九四一年にフェアバンク女史が、拓本による祠堂の図上復原をこころみたことは、一つの注目すべき業績であつた(Harvard Journal of Asiatic Studies, Vol. 6, 1941)。ところが新出の沂南石墓は、祠堂と墓室とのちがいこそあれ、完全なものであるから、それが研究上にもつ意義の重要さは改めて言うまでもない。それだけに曾昭燏氏等の報告書も本格的のものであつて、写真、実測図はもとより、拓影の勝れた図版、それも研究上注目すべき資料については、原寸大の拓影図版十九葉をのせる慎重さである。その本文では、まず三章にわたつて構造等につき詳しい記述を行なつた後、画像石の内容に対する考証を第四章でのべ、車馬出行図、樂舞百戲図、歴史故事画像、神話人物奇禽異獸図の各節にわたつて、武梁祠などの既知の類似的材料や文献史料などもひいてひろく考証を加えている。次の第五章では、表現技法について類品との比較考察からその芸術的価値を論じ、質的にも掘り下げて考えようとしているが、まずこれだけの準備によつて本墓の位置を考える用意をととのえた上で、次の第六章では本墓の年代考証を行なつてゐる。

大版六八頁にわたる本報告書は、まさに力作というべきである。

もちろん内容のくわしい点については批評すべきところもあるが、それはともかく、中国の過去の出版にかえりみるならば、これほど整つた報告書はなかつたと言つてもよいのではないかと思う。やや詳しく紹介した理由も、こうした報告書が出るようになったという事は、中国考古学界の活況とともに、近時におけるその著しい進歩を示すものにほかならないと考えたからである。

さて、沂南石墓は以上のように貴重な資料であるが、それだけに中国学界の関心も極めて強く、すでにいくつかの論致が発表されてゐる。そこで論ぜられてゐるのは、当然、本墓について一番根本的な問題となるべきその營造の時代の問題であるが、まず報告者曾昭燏氏は本墓を後漢末の靈・獻帝時代のものとしてゐる。その理由は、沂南地方の歴史にかんがみ、これほどの人力を費やす大工事は豪富と雖も倉廩がみちたりた平和時でなくては不可能であるから、曹操が陶謙を攻めてより以降の兵禍の時代の所産とは考え難いとする点にある。これに対して安志敏氏はそれを漢よりもおそく、北魏までは降らないもの、だいたい魏晉時代のものとすべき事を論じてゐるが(通訊一九五五・二)、その理由は、隅三角持送り式天井や石柱をもつなどの本墓の構造が、高句麗時代の石築壁画墳によく似ており、ことにそれが永和十三年(A・D三五年)の紀年をもつ朝鮮安岳発見の修寿墓によく似ているということにある。なお、このように時代を下げる意見では、李文信氏が、沂南画像に見える器物服飾の制度に関する考察からそれを晉時代のものとすべき論を発表しているが(通訊一九五七・六)、最近、曾氏は李氏のこの意見に対して詳しい駁文を発表している(通訊一九五八・五)。

このように沂南石墓の年代に関する見解にはなお一定したものを見ないが、一方では江蘇省東海県の昌梨水庫工事中に、沂南石墓と非常によく似た構造をもつ画像石墓が発見され(文参一九五七・一二)、しかもこの墓からは元興元年の紀年をもつ夔鳳鏡と非常に近い鏡が出てゐるので、この墓の報告者は、それにもついで本墓を後漢時代のものと推定している。もちろん鏡は年代上限の基準とは

なつても、下限についてはそこに問題がないわけではないが、本墓も沂南石墓の時代考察には有力な参考となるであろう。また安志徹氏がひいた朝鮮安岳の修寿墓については、同地の「河塚」と称せられている石築壁面墳のことが思い出される（駿台史学第六号）。この墓は料枳をもつた八角形の柱をもち、天井には藻井をつくつた高句麗通有の壁面墳であるが、その玄室の奥と右側に廊がめぐつてゐることが特色的である。ところが文物参考資料によれば、山東省梁山の柏松村でも五室の石室墓が発見されているが（文参一九五五・一二）、八角石柱をもち、画像を刻している上に、その玄室は三面に廊をめぐらせていると略報告に記されている。

そうするとこの両者は非常に似ていることになるので、柏松村古墓の構造や刻画像がどんなものであるかが非常に知りたくなる。なぜならば柏松村の古墓を高句麗時代のものと考え可能性は一そう強いから、それと沂南石墓との比較をこころみ、その相違、あるいは近似を知るならば、沂南石墓の時代考定には、さらに有力な一つの手がかりが得られると思うからである。

報告者曾昭燏氏が古墓の所在地の歴史事情にかんがみたことはたしかに勝れた着眼であるし、また安志徹氏が高句麗墓との近似に論拠をおいたことも、広い識見を背景にした勝れた見解ではあるが、沂南石墓一つだけを取り上げて年代を考えようとする態度には、やはり問題があると思う。石墓は沂南以外にも多く発見されているのであるから、少くともそれらの間の相互関係、相対的に考えられる前後の時代差乃至通有性、こうしたものの把握にまず何よりも力を入れ、しかる後に他地方との比較やその他の考察が加えられて時代

考定にもしつかりした議論がたてられるということ、これが考古学の常道ではあるまいかと考えるからである。

沂南石墓にあまり紙幅を費やしすぎたが、山東省濰県でもそれにおとらず規模の大きい石室墓が三座発掘をまつているというし（文参一九五七・六）、略報告せられているものだけでも石室墓研究の将来は実にすばらしい。沂南墓の場合の如き本格的な報告書が続々と公刊される日の盛大さが想像される次第であるが、なおこれら石室墓の中には山東省東平県（文参一九五五・一二）や嶧県（文参一九五五・四）の古墓のように、石面に壁画をえがいているものがある事を注意しておきたい。勿論その詳細はわからず、これ又将来にまたねばならないが、壁画をもつ石室墓ということになれば、われわれは東北地区遼陽の三道壕で発見調査された板石墓（文参一九五五・五）にもそれが見られることを当然あげておかねばならない。いわゆる「遼陽壁画古墳」の発見はすでに古いことであり、新中國でも新しく、勝れた例が知られたわけであるが、沂南石墓の報告者曾昭燏氏はこれらに関して次の如き意見を發表している。即ち、漢の滅亡後、多くの人士が遼東地区に乱をさけてうつり住み、そこで漢の風について彼等が残したものが遼陽三道壕で近時発見された曹魏時代の「令支・令張君墓」などをはじめとする壁画古墳であり、それが発展して高句麗石墓につづくものと解するのであるが、これは高句麗古墳の径路を考えようとした一つの試論として面白いと思う（沂南古画像石墓発掘報告）。

何れにしてもすべてはこれからであるが、どんどん増加する石室墓の資料が十分調査研究されれば、漢から三国・六朝にわたる芸術

の発展についての歴史もよほど明らかとなるであろう。

そうした研究資料として同じく重要であり、しかも石室墓とは相関連した性格をもつものとして次にあげねばならないものに四川の崖墓がある。それは断崖の岩壁に横穴をほつて墓室をつくつたものであるが、岷江ぞいに、上は彭山県より梁山を経て、下は犍為県に至るまで無数にほられている(文参一九五六・五)、その数は梁山附近だけでも三〇〇〇にのぼると言う。そのうちで規模の最も大きいものは奥行き九〇米をこえ、構造も複雑で、一般に料栱・石柱などを雕り出し、壁面には画像を刻しているというから、それは山東の石室墓に近い。しかしその画風には、山東などの画像石とはちがつた一種の風格があり、一そう活気をおびている点が注目されるが、それよりも更に重要なことは、これら崖墓の中には紀年銘をもつものが多数あるということである。その年代は西暦一・二世紀のころ、後漢代に属すると略報告には記されているが(文参一九五六・五)、紀年銘を有する崖墓の研究整理を十分におこなえば、漢代古墓の研究乃至石刻画類の研究にとつて、甚だ有力な足場をそこにきづきうるにかかわらず、この方は沂南古墓のような報告書も出ず、その様子がよくわからないのは、如何にも残念である。

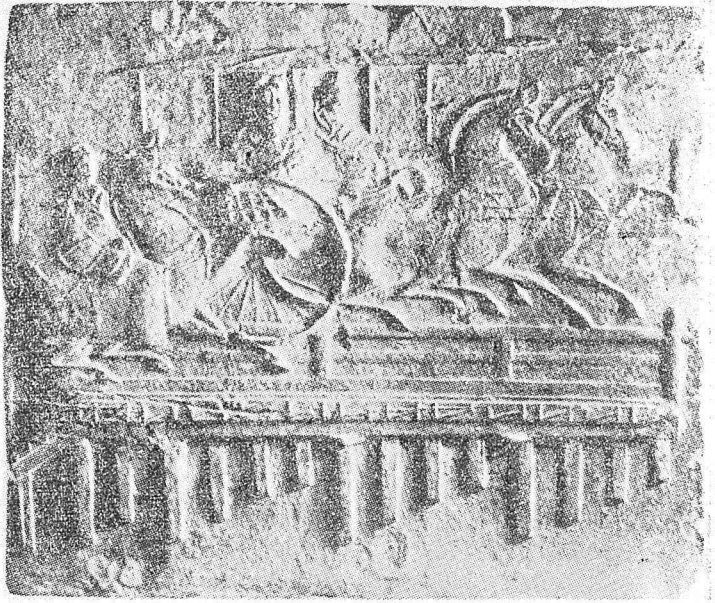
しかし略報告で、おぼろげながら知りうる崖墓の中で、特にわれわれの注意をひくのは梁山城郊の、麻浩堂とよばれている一崖墓であるが(文参一九五七・六)、その墓門の左辺額枋上には、明らかに仏像と思われるものが彫られているという。この像は決して後から追加的に彫り加えられたものではなく、しかも墓内の壁間には荆軻が秦王を刺さんとする図など、附近の崖墓にも見る漢代通行の画

像を刻し、墓室の構造も、永和や延熹など後漢の紀年をもつ附近崖墓と同様であるから、この像も後漢代のものとする可能性が多いわけであるが、もしそうとすれば、これは石刻仏像中の最早のものと考えられるのではないかという意見を李复華氏は述べている。沂南画像のうちにも蓮かと思われる植物紋様があり、また輪形の頭光らしきものをいただいた神人があるなど、仏教芸術の影響を反映すると考えられる要素が存在することを曾昭燏氏も述べているが、沂南石室を後漢代のものとするならば、これらは中国仏教芸術のごく初期の様相に対して、一つの新しい資料をもたらすものとなるであろう。

なおこの崖墓に関連して、四川省の古墓から出る石棺上にほどこされた画像のことも述べねばならないが、この地方からは、上記の石刻画類のほかにもう一つ、われわれの関心をもつとも強くひく芸術作品として、画像塚の類があることを是非、紹介しておかねばならない。それらは粘土のやわらかい肌のあたたか味を巧みに生かし、或いはのびのあるその粘着力が、型押し技術によつて作り出す静かな優美な凸線の走り、そうしたものをうまく駆使して、画像石とはちがつた、もつと気分の明るく、くつろいだ芸術を産み出していることに、われわれは非常な興味をそそられる。しかしこの画像塚にしても、その写真や拓影を録した書は少し出ているけれども、それらの本格的な研究書は現れておらず、その公刊が大いに待たれる次第である。

画像石よりも、より自由な表現様式という意味で、次に、話をもう一度、壁画墓にかえしたいと思うが、先にのべた石室墓に対し、

導室墓では、早く発見された營城子のそれが有名であるけれども、
 新中国では、河北省の望都で発見された一壁画墓が、沂南石室墓に
 劣らず関心を集めている。營城子の壁画も雄勁であり、重要な漢代



第3図 四川成都出土画像導 高 46 cm

絵画資料であるが、その無邪気な表現に比ぶれば、望都のものは本
 格的な絵画というにより近いものである。各人物像には傍書がある
 が、それによれば、ここに現わされているのは主記史・主簿以下の
 漢代衛寺属吏であつて、彼等の平常の活動状態が具体的に示されて
 おり、かかる壁画がえがかれている墓内の前室は墓主の弁事的外朝
 を示すべく、これに対して中室と、棺材をおいていた後室とは、墓
 主の居住的内寝を示すものであろうと述べている姚鑿氏の見解は甚
 だ面白い(文参一九五四・一二)。本墓を、その壁面に朱書された
 銘贊の文句から浮陽侯、即ち後漢順帝を擁立した大宦官孫程の墓に
 比定する試論を、氏はまた発表しているが、安志敏氏は孫程の死が
 陽嘉元年(A・D一三二)なるに對し、本墓に近い第2号墓からは
 永和五年八月(A・D一四〇)の買地券が出ていることを指摘して、



第4図 望都漢墓壁画

前記試論の可能性を一そう確実にしたことも重要である(通訊一九五七・二)。絵もしつかりしており、時代もどうやら明らかであるとすれば、本墓が重視されることは当然であるが、報告書としては李捷民・姚鑿氏等によつて「望都漢墓壁画」と題する大版の書が出ている。しかし安去敏氏が評した如く、本書は美術の見地にかたより、随葬品の種類・分布、その他の各種事実の詳細な説明がなく、壁画以外については、十分了解することがむづかしいという欠点があることは否めない。

しかしそうしたこととはともかくとして、望都の壁画墓が、墓主の車馬遊行や迎賓宴礼、或いは歌舞奏樂演戯をえがき、また庖厨の圖を配する一般壁面墳とは趣きを異にするものをもつてゐることは注目にあたいするが、これと対照して面白いのは、内蒙古托古托県で発見された漢代壁面墓である(文参一九五六・九)。ここでは壁面人物の傍書には、単に「閼氏從奴」とか「閼氏從婢」とか書いていて官職的記録が見えないが、それは墓主閼氏が、おそらく仕途につかなかつた地主的身分のものであつたから、ただ奴婢の多きを誇示するにとどまつたものであらうと、報告者である羅福頤氏は考察している。このように、壁面を漢代社会の反映として見てゆこうとすることは、たしかに面白い視点であるが、しかしその反面において、芸術学的な分析、漢代芸術の質的な省察といつた掘り下げた考察がまだ見当らないことは淋しいと思う。

なお墓室の裝飾というについては、朝鮮楽浪の発掘によつて、木槨墓にも彩画のあるものがあつたことをわれわれは知つてゐる。中国では、まだこの種の裝飾をもつた漢墓が報告せられたのを私は

知らないが、山西省の長治市分水嶺で発掘された戦国時代の古墓では、纏に美しい漆絵が施こされ、月形に切つた金箔の飾りがついていたとあるから(考古学報一九五七・一)、こうした類の漢墓もやがて発見されるのではないかと考えられる。

以上、新しく見出された漢代裝飾古墓の主だつたものについて概観し、また中国学界が、それらについてどのような動きを示してきたかを述べてきたが、最後に、漢代の芸術を取扱つた專著が二冊あるので、そのことにふれておきたい。

その第一冊は朱傑勤氏の「秦漢美術史」であるが、これは一九三四年の著書を六割方も書き改めて五七年に出した再刊本である。その内容は広く文献にあたることによつて、すでに失われた往古漢代の建築や絵画・書・彫刻・工芸などに対する概観を与え、それと共に新らしく発見された資料からも重要なものを取り入れて、無駄なく要領よくまとめられている。教育目的から編まれた書物であることは明らかであるが、それにしても漢代芸術に対する質的な掘り下げの叙述がふくまれないことは何かの足りない。しかし考古学者はとかく文献にうとく、美術研究者は興味ある方面に没入して全体を忘れやすいと言へば、これもよき手びきの書とすべきである。

第二は常任俠氏の「漢画芸術研究」であるが、これは前者とちがつて大型本であり、立派な図版を集めて漢画研究資料図巻の用もかねそなえている。本文の要旨は、すべて政治・文化上の現象は社会経済的基礎の上にもつてのみ正しく解釈しようとする根本的

立場から漢画芸術を理解せんとするものであつて、まず漢代芸術開花の基礎を、鉄器使用の普及による富の集積と商工業の股脈、そして文化の一般的向揚発展という歴史過程の一端、その具現として把握すべきことを論じている。そして、例えば画像石墓が多く見出される山東・南陽・四川などの地は、塩鉄の利によつて栄え、大商人・大地主・大官僚など豪門・富室の集つた地方でもあつて両者のあいだの関連を考へべく、このように漢画分布地域と当時の社会との關係を考へようとしている事なども面白い着眼点である。

言うまでもなく漢墓は、いわゆる統治階級のものであるから、そこに表現されるものは当然彼等の好みに応ずるものであるから、その内容を理解するためには、漢代の統治者階級がいだいた思想をかえりみる必要があるとして、本書ではさらに漢代思想とその芸術的表現との問題にまで深めて論を進めていることもあげねばならないが、前記沂南石室墓の報告書とともに、本書は漢代美術に関する專著として、中国学界を代表すべきものと言へるのである。

学界消息

史学研究会關係

史学研究会七月例会

七月五日(土)午後

「技術史の諸問題」

原始農耕について

前方後円墳の形態推移

技術史の意味

史学研究会九月例会

九月廿七日(土)午後

臨地講演 醍醐寺(三宝院・金堂) 日野法

界寺

(講師)

史学研究会十月例会

十月四日(土)午後

「現代史の諸問題」

新航路のバランス・オブ・パワー

中国の第一次世界大戦参戦について

第一次世界大戦と日本の参戦

波多野善大氏

井上 清氏

国史關係

読史会七月例会 七月一二(土)

午後一時 於京大陳列館演習室

頼母子について

三浦 圭一

上野 照夫氏

自由民権運動と農民

真下 英二

——群馬事件を中心として——

読史会九月例会 九月一三日(土)

午後一時 於京大陳列館第二教室

自由民権運動期の改進黨

中島 節子

正倉院文書雜考

岸 俊男

読史会秋季見学旅行 一〇月一〇〜一四日

八幡製鉄所—箱崎宮—九州大学—觀世音寺

—太宰府—長崎市内(大浦天主堂・出島・

崇福寺・爆心地址・博物館・県立図書館・

代官管理所など) —雲仙にて解散。参加者

は小栗田・赤松・柴田教授、岸助教授、

上横手講師ほか二〇名。解散後、有志は三

班に分れ熊本柳川方面・佐賀方面への史料

探訪、筑紫古墳群の見学等を行った。